

# せむしあひい

発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第六十六号（一日発行）  
平成七年三月一日

## 北海の古平風土物語（三三）

親しい級友・海田綱市君 一四一  
大正十四年・高等科二年 担任千葉信夫先生（九十歳）

高橋 源 五口

### ② 化け物退治 「剣道達人」の海田君（下）

学校からの帰り道、山之神、（浜町中央通りの町はずれにあった小さい神社）を過ぎて、わが部落（旧第九区部落会、現在の栄町）に入ると間もなく、困高野さんの土地から、五の戸、（ごのへ）南部五戸郡から移住して来た正武家さん）の裏を通り、桐畑を抜けるまでの三町ほどの道路脇一带にはトドマツ・カラマツ・スギ・キリなどの大木が生い茂り、小川や冷水沼のふちは深い笹やぶであった。昼なお薄暗く、夜道は特に気持ちが悪かった。

そんなことから、五の戸の裏の道路脇に生えている五、六本の大きな赤松の下に、夜な夜な幽霊が出るとか、高い枝に、いずこ、がぶら下がっていて、そこから赤ん坊の泣き声が聞こえてくるとか、夜道に変な化け物がうろついでいて袖を引っ張られたとか、そのほかお湯ならぬ肥だめに入っていたとか、狐につかれて頭が狂った人がいた、というようなうわさのあるいやな所であった。

当時、こんな話は町内のここかしこにあって、つきものや化け物払いのご祈祷をしていたのが、山の神の、いたこさんの、福島おきばあさんであった。

ときどき赤松の太い根本に、狐や化け物払いのご祈祷で上げた赤飯や、油揚げなどを盛ったお供えが置かれていたが、そこを通る時はいつも走って通りぬけた。冬の新雪のころになると狐の足跡がたくさんあるのを登校の時などよく見かけたもので

ある。

さて海田君だが、ここにさしかかると彼は急に意気けんこうになり、「俺は剣道の達人だ。先生から面をとれるまでの腕前になったんだ。幽霊、化け物、狐なんかには負けられない。俺が退治してやる」と、学校の道具の入ったふるしき包みを雪の中へ置くと、竹刀を盛んに打ち振るのである。

「木の枝が落ちれば、俺の勝ちだ」とばかりに、竹刀を振りかざして飛び回ること数十回。だがなかなか松の枝は打ち落とせない。汗を拭き拭き、雪をかじ

### 蝦夷地全土に

「ねずみ」が大発生

天明四年辰年（一七八四）の六月から九月ころまで、蝦夷地におびただしいねずみが現れたことがある。

ある土地で、鮭を入れて置く穴蔵に水を入れた大樽を置いたところ、翌朝、その樽に多くのねずみが落ちて死んでいた。

またアイヌ人は、小さい箱の四隅に縄をつけ、それを上から吊してその

つては、やつのことで一本の小枝を打ち落とすと、「俺は勝ったぞ！」と、大声で叫んだのである。

彼は卒業するまで、自称「剣道の達人」と言っていて、それからというもの冬になると、落葉松の下枝を一生けんめい打ち落として、剣道の稽古をしていたものである。

当時の周囲の様子もすっかり変わり、幽霊、化け物や人をだます狐は彼に退治されたのか、近ごろの古平町ではもうこんな話は聞かれなくなった。

（小樽市在住・八十二歳）

中に赤ん坊を入れ、泣いたりするとこの箱をゆすってあやしたりするが、家族が留守の時、ねずみに赤ん坊が食い殺されてしまったという。

また、長わづらいで寝ていた病人の足をかじり大病で声も出せないでいるうちに、これもついにねずみに食い殺されたという。

その後ねずみは見えなくなつたが、海を渡って行ったとのことである。

## アイヌの《ことわざ 世間ばなし集》から

## 亡き恩師の命日にちなんで

連日のスキー場通いで、お見舞にも行けなかつたことが悔やまれる。まさに「巨星落つ！」長いながいご交際があり、私を育ててくれた方である。若いころの、私の生意気な傲慢（ごうまん）無礼で向こうつ気の強さを反省している。そのころ恩師は、古平小のPTA会長として多忙な身であつたが、私は運営委員の一人として、なんの教育観もなくムチャクチャな発言をしていた。会合の後には必ず校

## 故郷を想う 福井孝平

長以下、私宅にだれこんでケンケンガクガク……。ただ酒を飲んで来るのがあのころの慣わしだった。恩師はどう思つて聞いていたのか。この若僧め、なんと無教養なヤツよと思つていたのかも知れない。戦後間もない荒れた時代であつた。

民主主義なんて皆は解つていたのかなあ？ 私には、学ぶほどに赤い思想にかぶれかかつていたし、叔父・田畑寅雄の影響もあつたのか、読む本は社会主義

万能を唱えるものが多かつた。思うと混乱した持代だったの

だが、恩師はいつも、新しい保守だと強情だった。教師にも、これという筋の通つたものはない。もし私がある組織にいたら、ガチャガチャ組合活動に猛進していたかも知れない。ほんとうに恩師とは良き出会いであつた。ふところが広く、深い教養人であり、だんだん感化されてしまつた。

恩師の引き立てで、体育指導委員・社会教育委員などと枠がはめられ、野犬にも鑑札が付い

てしまい、町内に児童愛護会なるものを作つてどうやら地に着いた運動を学ぶようになった。

もともと好きな絵を描きながら、柔道少年団から町体育連盟を結成したり、ソフトボール・スキー・野球・水泳と実技に手を広げて今日に至つた。

好きな本を読み、たまには囲碁に親しみ、短歌・俳句と下手の横好き精神は相変わらずで、とうとう七十六歳まで生かされている幸せを感謝している。も

## 随想

### 練場を思い出す老後に 10

渡辺 ハツエ

二月も半ばを過ぎると、ずいぶん日脚が伸びてきました。春は確実にやって来ています。夕食後、主人とだんらんの時、昔の練場のことが話題になります。主人は、古平生まれで明治の人間です。練にまつわる思い出話は、いくら聞いても私は飽きることがありません。

私の子どものころは二月ともなると、漁場によってはもう本州方面から若い衆が何十人も来て、網元の家の回りや干場、それと浜の雪投げをやりやります。雪投げが終わると、今度は倉庫からサンパ舟を出しますが、その辺りはほかよりも雪解けが早いので、子どもたちのかつこうの遊び場になり、大勢の子どもたちが集まって来たものです。

う少し頑張らないと私の罪業も許してもらえないので、ちよつとだけ命をください。恩師・大沢さんの命日にちなんで一文を――。

恩師の旧家を見つつか今日もまたスキーかついで山に入りゆく

三月から四月に入ると、今でも海が油なぎの穏やかな夜などは、ローソク岩の方から前浜にかけて、勇壮な若い衆の網起こしの声が聞こえてくるような錯錯にかられ、思わず苦笑することがあります。

昔、亡父が「鯉の群来るのは曆の上で四月の『清明』の前後で、そのころが油断できないんだ」と、言っていた言葉が懐かしく思い出されます。古平では昭和二十九年を最後に、前浜には「春告魚」といわれる鯉はまったく姿を見せなくなつてしまいました。

時代もすっかり変わつて、和舟で櫓（ろ）を漕いで鯉を捕つていた時代はもう夢物語となりましたが、私は主人の自慢話や苦労話にも、素直に耳を傾けてやる老後でありたいと思つております。

「練捕る爺の昔を婆が聞く」※『清明（せいめい）』旧曆の三月、春分から十五日目にあたる日で、今の曆では四月四〜五日ころになる。

# 遙かなる故郷の思い出

6

橘 義 春

## 四 お化けの話 (上)

昔、私の祖父母が若いころ、家の隣に子どものいない大工さん夫婦が住んでいた。この大工さん、悪いことに浮気、今でいう不倫をはじめてしまった。

当時は鯨が大漁で、景気が良く、街には料亭が軒を並べていた。そこには、今ふうで言えばホステスさんがたくさん居て、大工さんはその中のホステスさんのひとりに熱を上げてしまい、毎日が朝帰りの、午前様になつてしまった。その大工さんのおかみさんはとうとう思い余つて、ついに自宅で首つり自殺に及んでしまったのである。それを見つけた父親は驚き、早速息子のいる料亭に飛んで行き、女と一緒にいた息子を引きずるようにして連れ戻し、その現場を見せた。さすがに息子は見るなりへなへなど座り込んで、「おっかア、俺が馬鹿だった、許してケレ——」

と、大声を上げて泣き出してしまったという。

それからの彼は改心し、酒も女あそびもピタリと止めてしまひ、毎日、居間にある仏壇に向かつては念仏を唱え、供養にとめた。その念仏が隣のわが家にまで聞こえていた。

しかし、そのうちだんだん様子がおかしくなつてきた。夜中の十二時を過ぎたころになると

「おっかア、許してケレ、帰つてケレ、ナムアマダブツ、ナムアマダブツ……」

と言うようになり、それが朝夕まで続くことがあった。

ある時、祖父がこっそり様子を見に行つたところ、彼は青い顔をして目はくぼみ、頬はげつそりとこけていた。声をかけると彼は、祖父に「助けてくれ」としきりに頼んだ。そのわけを聞くと、真夜中になると死んだおかみさんが現れ、囲炉裏（いりり）の前にべつたりと座り込み、横目でジッと恨めしそうな

## 【△7日はこんな日】

### 船入潤建設に難問と迷信

『漁業権』と『曲がった防波堤』

[昭和8年]

昭和になると、それまで豊漁であった鯨が一転して凶漁になり、新しい漁業としてすけそ漁が盛んになると、船入潤への要望が急速に高まってきた。

町では昭和五年、船入潤建設工事に取りかかる予定であったが、起債の許可が遅れ、翌六年に着工し、同八年に総工費約三十一万円、防波堤延長二百五十

米、防砂堤五十六米の船入潤が完成した。

ところが、港口に当たる位置に鯨定置網があり、出入りする船舶にとつて支障があることから、町会（町議会）で、買取することを決議したが、漁業権を持つている漁業者と金額のことで折り合いがつかず、買取問題はこじれてしまった。

顔でこつちを見つめ、いくら念仏を唱えても明け方まで帰らない。これでは俺ア、かかあに殺されてしまう。なんとか助けてくれ、ということであった。

葬式もおわり、仏壇も新しく買ってきて毎日供養しているのに、幽霊となつて毎晩出てくるのでは、お経やご祈祷では収まりそうもないし、ハテ困つたものだと祖父は思案していたところ、たまたま近くに、流れ者の漁師で、ばくち好きなどひとりの男がいた。どうゆうわけか祖父に心服していて、この話を聞くことになった。

町会では同八年七月に、「漁業権は公益上支障あり」として許可取り消しを農林大臣に申請したが、その後、漁業者からの漁場変更の申請が許可になつたことから、町では申請を取り下げ、この問題は一応解決した。

防波堤については、当初、南南西（丙IIひのえ）の方向に延長する計画であったが、ある有力者の「方角が悪い」という一言で、根元から少し延長した所で南南東に向きが変えられ、そのままの形で現在残っている。

# 西下喜一郎先生 をしのんで

池田 テル

テレビに映る体操や陸上競技などを見ていて、私は、かつて小学校におられた西下喜一郎先生のことを懐かしく思い出します。

先生は体操の演技がすばらしかつただけではなく、陸上や水泳も大変得意で、沖村（沖町）から丸山岬までも泳ぎ、男子生徒のあこがれでもありました。

大正十三年に赴任されましたが、それから間もないある朝のこと、まだ生徒もまばらな運動場で「先生、逆立ちして見せてくれ」という生徒の声に、「よしッ」というと、両手を床に付け、両足を伸ばし、胸をそらせて「オイチニ、オイチニ：：」と進みました。「うめえなア」嘆息をもらす生徒たちに、「お前らもやってみれ」と声をかけていました。初めて見た先生の逆立ちが、それから私の頭か

らはなれませんでした。

運動会になると壇上に上り、八百人以上もいた生徒の前で号令をかけられた、きびきびした姿が今も目に浮かびます。

男子生徒にも信望がありました。また女子にも慕われていました。ある時、羽子板の追い羽根が運動場の梁（はり）の上ののつてしまい、困った私たちには、西下先生にそれを取ってくれるよう頼みました。すると先生は壁を伝わって梁に上り、そのほかにもたくさんあった羽根をみんな取ってくれたのです。

大正から昭和初期にかけて

## 私の見たにしん場風景

6

### 五、漬物支度

切り上げがすむと、津軽や南部方面から多く来ていた漁夫の人たちも帰り、鯨漁場はまたもとの静かさにもどります。特別の仕事が無い限り、ヤン衆といわれる人たちのほとんどは農家ですから、帰るとすぐ田植えが待っていました。

漁場の親方の家でもお祭りがすむと、来春の鯨場に食べる漬

りて来られて先生を見ました。それこそ全身ほこりだらけでした。

昭和十九年の秋、先生は入舸村（現在・積丹町）の日司小学校長になられました。家庭の都合からか校長を辞任され、また古平町内の学校にお勤めになりました。

退職後も町内に住まわれて、いろいろと町のためにご尽力され、昭和四十八年、古平町文化功労賞を受賞されました。奥様も、永年助産婦として献身的に活動され、昭和四十三年、古平

### 竹内コト

物用の大根の種まきをします。

大根まきには肥料なんかやりませんが、鯨粕の干場や鯨を掛けた納屋の下には肥料分がたっぷりありますから、秋には見事な大根がとれるのです。納屋の下には、浜から揚げた磯舟に水をいっぱい入れ、その中で大根を洗うのです。十月の中旬を過ぎると、あちこちで漬物づけが始まります。漬物時期になると、

町公益功労賞を受賞されております。

先生は、健康のすぐれない奥様のために、古平の地に心を残されながらご子息の許へ移って行かれましたが、昭和五十八年一月十日、八十歳をもって、札幌の病院でお亡くなりになりました。

文化功労賞弔辞の中によまれば慕はれきし君の一世（ひとよ）思ふ

子どもたちが仕事をしている親の側で、大根の青いところをくだものがわりにかじっていたものです。大根がおやつがわりでもあったわけです。

漬物は、にしん漬・大根の切り漬・たくあんなどいろいろ漬けますが、漁場では四斗樽といわれる大きな樽で、たくあん漬けを十樽以上も漬けます。漁場では漬け物と汁もの、それも塩汁だけがきまった毎日のおかずで、たまに野菜や煮魚などがつく程度でしたが、ご飯だけはいくらでもありました。こんな食事によくあんな労働ができたものだ、いま思うと不思議なぐらいです。でも、米だけは吟味して上等なものでした。